スーダン

【国名】

●スーダンの語源は，古代エジプト人が「黒人の国」と呼んだことに由来する。古代ギリシアではスーダンのことを「太陽が昇り，また沈む国」と呼び，「スーダンに住む人々は，太陽の恵で肌が黒くなった。」という言い伝えがあったという。

●ちなみに，首都ハルツーム（Khartoum）という名称は，白ナイルと青ナイルの間にある細長い地形をアラビア語で「象の鼻：アル＝ハルツーム（al-Khurtum）」と呼んだことに由来する。

【国旗】

赤，白，黒の汎アラブ色に，緑色の三角形がデザインされている現在の国旗は1970年に制定されたもの。

【古代史】

●古来，現在の南エジプトと北スーダン一帯のナイル側流域はヌビアと呼ばれ，北方の古代エジプト文明の影響を強く受けた。紀元前2,200年頃，南部から北上してきた黒人がこの地域にクシュ王国と呼ばれる王国を建国した。その後クシュ王国は一旦はエジプトによって滅亡させられたが，紀元前900年頃ナパタを都として再興すると，衰退したエジプトに攻め入って第25王朝を建国した。その後，第25王朝はアッシリアに敗退したが，旧クシュ王国の残党はヌビアへ逃れ，紀元前600年中頃にメロエに移るとメロエ王国を建国した。

●当時のロエは世界有数の鉄の生産地であり，メロエ王国は鉄器の国際交易により繁栄した。現存するピラミッドの数はエジプトよりも多く，1,000近くにも及ぶ。またメロエ王国はエジプトの影響を脱してブラック・アフリカ的な独自の文化（メロエ文化）を生み出し，

メロエ文化の影響は国際交易を通じてサハラ以南のアフリカに深く浸透した。

【イスラム化】

●イスラム教は7世紀にアラビア半島で誕生すると，イスラム商人やスーフィーを介してアフリカ大陸に伝わった。7世紀中頃以降，イスラムのアフリカ侵入が本格化し，北アフリカに続き，ヌビア，サハラ地域，西アフリカ等が次々にイスラム化されていった。

●現在のスーダンにあたる地域でも14世紀頃からイスラム勢力の進出が加速し始め，16世紀初めには現スーダンにおける最初のイスラム国家であるフンジ王国が成立した。16世紀末にはダルフールでもダルフール・スルタン王国が建国され，ダルフール地方でもイスラム化が進んだ。

【地理】

●スーダンの面積は，約 188 ㎢であり，アフリカ第３位の国土を有する（日本の約５倍。2011 年の南スーダン独立までは，アフリカ・アラブ世界の最大国であった。）。

●スーダンの代名詞とも呼べるナイル川は，長さ 6,650 km，流域面積約 287 万㎢に及ぶアフリカ最長級の大河である。ウガンダのビクトリア湖を水源とする白ナイルと，エチオピアのタナ湖を水源とする青ナイルは，スーダンの首都ハルツームで合流してナイル本流となり（合流地点では青ナイルと白ナイルの色が青と白にくっきり分かれて見える。），エジプトを貫流して地中海に注いでいる。

【農業】

●最近では産油国として知られるスーダンだが，もともと農業国であり，アラビア・ゴム，ゴマ，綿花，豆等が主要農産品。特にゴマは，インド，中国，ミャンマーと並んで世界４大生産国の１つであり，日本にも輸入されている。

●「ニジェールとナイルの間に」（トインビー著）によれば，ナイル川の豊富な水と肥沃な土地をもってすれば，スーダンは，「世界の食糧庫」になる可能性があると言われている。スーダンの可耕地は約１億ヘクタール（国土面積の３分の１以上）と言われているが，現在耕作地はわずか約 1,240 万ヘクタールにすぎず，農業は大きな可能性を秘めている。

【アラビア・ゴム】

●アラビア・ゴムは，アカシア属のアラビアゴムノキの樹皮の傷口からの分泌物を乾燥させたもの。乾季に幹や枝に傷をつけ，一週間ほどおいて固化した分泌物をもいで収穫する。医薬品の錠剤のコーティング（糖衣），切手の接着面の糊，水彩絵の具，ガムシロップ等に用いられる。日本が輸入するアラビア・ゴムの６割はスーダン産。

【スーダン豆】

●アラビア語でスーダン豆（フール・スーダーニー）といえば，ピーナッツのこと。スーダンのピーナッツの作付面積は世界６番目（中東・アフリカ地域ではナイジェリアに次ぐ２番目）であり，ピーナッツはスーダンの代表産品の１つ。スーダンでは，ペースト状のピーナッツをスープの隠し味や，唐辛子とあえてソースに使う。こうしたペースト・ピーナッツはスーク（市場）や道端でよく売られている。

【アラブとアフリカの架け橋】

●スーダンは，歴史的にはアラブ・イスラム世界との関わりが深いものの，経済的・社会的な発展段階や地理的概念でとらえるとアフリカとの関わりが深い。AU 創設時（当時 OAU）からのメンバーであるとともに，アラブ連盟にも所属しているスーダンにとって，「アラブ」であることと「アフリカ」であることは，決して矛盾することではない。スーダンはアラブとアフリカを繋ぐ接着剤，相互交流の架け橋という地位にある。

【牛】

●南部スーダンには半農半牧を生業とする人々が多く，彼らにとって牛は財産（牛の価値は，角の大きさ・形，体の大きさ，色等によって決まる。）そのもの。

●牛の利用方法は多岐にわたる。結婚の際は，男性の家族から女性の家族に数頭から数十頭の牛が婚資として渡される。また牛の授受は，住民間の紛争やもめ事の解決手段でもある。牛肉や牛乳は貴重なタンパク源であるほか，牛糞を焼いた灰は虫除けとして，牛の尿は（他集団と区別するため）髪の脱色に使われる。

【原油】

●1999 年８月，紅海に臨むポートスーダンから原油の輸出が始まり，スーダンは原油輸出国への仲間入りを果たした。スーダン南部及び西部の油田で採掘された原油は，全長約 1,600 kmのパイプラインによってポートスーダンまで運ばれる。南スーダン独立直前の産油量は，約 50 万バレル／日であったが，南スーダンの独立に伴い，スーダンはその４分の３を失うことになった。

【鉱物資源】

●広大な領土を誇るスーダンの地下には，石油のみならず，金，銀，銅，マンガンからウランに至るまで多くの鉱物資源が眠っていると言われる。中でも金は北部の砂漠地帯を中心として近年 2,000 Kg/年の産出があり，スーダンは，南ア，ガーナと並び，アフリカにおける金の３大産出国の１つである。

【ハブーブ（砂嵐）】

●砂漠地帯が国の大半を占めるスーダンでは，春の到来（４月から６月）とともに，ハブーブと呼ばれる砂嵐が起きる

風に乗って砂が押しよせ，

あたり一面に砂が舞い，

日本の春かすみのように，

もやがかかっているように見える。（了）